
不思議な国のアリスン1

ナナ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

不思議な国のアリスン①

【著者名】

ナナ

【あらすじ】

不思議な国のアリスのパロディーです。

私はアリスンといいます。不思議の国のアリスではありません。

「不思議な国に行きませんか？」

と、頭の中に響いた突然の声に誘われるまま - - - - -

それは夢なのか本当に起こったことなのか分かりません。

何をどうしていたのか、自分の身に起こったことなのに覚えていないからです。

- - - - - 気がついたらウサギの後を追っていたのです - - - - -。

そしてアリスンは穴に落っこちて不思議な部屋にたどり着いたのでした。

「何なの？！この部屋！！」

そこには、白い壁で囲まれていました。窓はありませんでした。ただ、小さくて通れもしない扉が一つあるだけです。

これはアリスと同じですね。

「アリスと同じね！？ それなら私もわかるわ！！」

アリスンは自信に満ちた声で言いました。

お決まりの部屋の中央にはテーブルがあつて、クッキーと小瓶がありました。

アリスンは迷わずそれらを口にしました。

小瓶の液体を飲むと、体がオッきくなりました。

次にクッキーをかじると、体がちっさくなりました。

とりあえず小さくなつたのを利用してアリスンは、目の前の扉を開けて進みました。

扉を抜けるとそこは綺麗な花がたくさん咲いていました。アリスンの身体は、元のサイズに戻っていました。安堵して、綺麗だと見

惚れていると、急に話しかけられました。

「おい、おまえはだれダッ！？」

「ダレダッ！？」

「誰だつ！？」

「ダレだつ！？」

相手は怒っているようでした。しかも大人数。

声のした方をアリスンは振り向きましたが、誰一人として居ませんでした。

あるいは綺麗な花くらいで・・・・。

そういうえば、アリスの話では花がしゃべっていたような・・・・いや、そんなことがあるはずがない。

しかし、さつきはあんな薬？があつたくらいだしねえ。

あれこれ悩んでいると、ドスッと後ろから誰かに肩を叩かれました。

そつと振り向くと、アリスンと同じぐらいの大きな芋虫がこっちを見ていました。

その芋虫は、赤黒く醜く太って、口らしき辺りから、だらだらと唾液を垂らしていました。超大型犬並みの、いわゆる巨大芋虫です。耐え難く『気持ち悪い』としかいいようのない姿なので、アリスンは『キモ虫』とひそかに名づけました。

おまけに青臭くてたまらないので、十歩ほど後ろに下がりました。するとキモ虫は九歩前に進んで来るではありませんか。

どうも、アリスンを襲つつもりのようです。

「食べる気なの？いや、私、おいしくないから、病気になるよお」

周りからはケタケタと甲高い笑い声が、どこからともなく聞こえてきます。

アリスンは注意深く見回しますが、やはりあるのは綺麗な花、花、花。

そこで、じつと田の前の黄色い花を観察してみました。するとその

花の茎が、クネクネと動き始めるではありませんか。

ついでに笑い声もあげて、

「アハハ一、いい気味ね？」

「食べられちゃえば？」

と、芋虫をそそのかします。

「うわあ！？」

アリスンはつぐづぐ、変な世界に来たんだなあと心から後悔しました。

こうなつたら、逃げるつきやない！

対処方は、それしか頭の中には浮かびません。

巨大芋虫と、じつと田を合わせたまま・・・・・・・・

ぱつと振り返ると一目散に走り出しました。

ドスン、ドスン、地響きが追いかけてくる。

振り向かなくとも、その気持ちの悪い化け物が背後へと迫つてくるのが感じられました。

でも逃げるしかない。

逃げながらアリスンがクネクネと動く花を踏みつけると、花が悲鳴を上げました。

「痛いじゃないの、やめてよね！」

花たちは、そういうとアリスンを睨みました。

「ごめんなさい、わざとじゃないのよ？」

アリスンは右手を振つて誤りながら、器用に地面を選んで走り続けました。

ぶしゅつ、ぶしゅ、しゅつ。キモ虫は、悲鳴を上げる花たちなどお構いなしに、口から唾液を飛ばしながら、進んできます。

「あつちへいけ・・・・、寄るなあつ

絶対に捕まるもんかっ！」

と、アリスンは全速力で突つ走りました。

「上野の」

「助けて」

さっきまで人を馬鹿にしていた花たちが、アリスンに懇願してきました。やがて、いつせいに顔を向けて、

「お願いだから、逃げないで！」

「お願いだから、止まつて？！」「

と、合唱しました。その歌声は、エコーまで掛かり、すごい音量となつて、周りに響きました。

そしてアリスンはついに - - - -

卷之三

怒鳴って耳を塞いでしゃがみ込んでしまいました。

「ああい、もひとふれくなりなづけやだぬよつ」と、ほやした瞬間、いい事を思つておひました。

魔法のクッキーがあるじゃんか

アリスンは、急いでスカートのポケットに残っていた魔法のクッキーをかじりました。

あれよあれよと、ちいさくなつて、花たちからも、キモ虫からも見えなくなつてしましました。やがて、彼らとの距離は少しずつ開いていったのでした。

走るのに疲れて、気がつくとそこはきれいな庭のあるお城でした。

目の前をトランプがよろよろと歩いて行きました。（しかも人間の顔が付いていました） 両手にペンキのバケツを持つて・・・・・・

●

「はあつ、これでいいかい？」

真っ赤な顔をして、息を切らせながらバケツを運んだスペードの3
が仲間に確認しました。

「刷毛を洗つてこい」と言つたじやないか」

しかめ面をして、ハートの6が言いました。

その隣はダイヤの8でした。

「ペンキの色は黄色だと言つておいたのに、それは赤じゃないか」「オレはこの赤の方が好きなんだよ！」

スペードの3が喚きました。話がかみ合つていません。それぞれが勝手に思つたことを言つています。

アリストンは、おもしろくなつて聞き耳を立てました。

横から見ると、彼らトランプ達の体には厚みがありますでした。ペラペラのヒラヒラです。良くあんな重い物が持てるわね。

「刷毛が無ければ、そもそも塗り変えることだつて出来やしない。いつたいどうすればいいんだ」

そうハートの6が言つた時、白バラの後ろに隠れていたアリストンに気が付きました。

「そうだ！！こいつの髪の毛を使えばいいぞ」

「誰か、縄をもつてこい」

ダイヤの8がハシゴの上から言いました。

「ハサミはどこだ？」

スペードの3が辺りを見回しました。

「なによ黙つて聞いていれば、私を刷毛代わりにするですつてアリストンは、怒つてトランプ達の前に出てこつてしましました。

「どうかこいつ誰だ？」

大雑把らしいトランプ達は、やつとせう尋ねました

「私はアリストン。14歳のかわいい女の子よ」

自分でかわいいと言つてしまつた。はずかしつづけ フフン

「それより、何であたしの綺麗な髪の毛を使うのよ」

アリストンがそう言つと、ハートの6はじとつとした田附をしました。

「綺麗？はんつ、この国では女王さまの髪が一番綺麗なのさ」

偉そうにふんぞり返りながら、彼は言い切りました。

「おい、お前の髪は、ボサボサでチリチリじゃないか刷毛にしたほうが役に立つぞ」

スペードの3は、痛い所を突いてきました。本当はアリスンは、艶の無いクチャクチャの茶色いくせつ毛がコンプレックスだったのです。

馬鹿にされたアリスンは悔しくて涙が出そうになり、下を向いてしました。

そして、ふと彼らの足元に視線を向けると、刷毛があるではないですか

「刷毛落ちテンジャン！！」

するとダイヤの8はしれつとして、

「知っていたわ」

「知つてたの？ そつなんだ。じゃあもつ、私に用は無いわね」

小憎らしいトランプ達ね・・・・・・。アリスンはそう思いながら話を流しました。

うーん。『不思議の国のアリス』話だと、この辺で女王様が出てくるはずなんだけど・・・・・

アリスンが、そう懸念していると。

「何をしている。バラは黄色だといつただろう！ まだ終わらんのか？ こんな使えんやつらは処刑だ！」

美しい顔からは、考えられないような怒鳴り声を発した女王様が現れました。

5メートル先の豪華な門の前で、黄金の冠を付け、豊かなプラチナブロンドの髪を激しく揺らしながら、扇子を振り回して怒っています。

アリスンは、あつけにとられてその様子を見つめてしまいました。
こわーい、こわーい。

それにもほんとに綺麗ね、女王様の髪・・・・・・

「女王様、そつそれだけは・・・・・」

お付のスペードのジャックが、慌てて止めよつとします。

「ええい、黙れ」

女王が言つたその時、ハートの6が後ろから、スペードの3を羽交い絞めにして、こう訴えました。

「コイツが、黄色は嫌だといって、邪魔をするのです。こいつを処刑してください」

スペードの3は、抵抗しながら、

「違います。こいつがこのままでいいと言つて邪魔するんです」

「私が処刑してやる」

急にダイヤの8が、園芸バサミをチョキチョキさせながら、二人に切りかかろうとします。

「ええーい、私に意見するとは何事じやーお前達、全員処刑じやー

」

イライラした女王様は、ドスドスとアリスン達のところまで近づいてきました。

「そなたは、何者じや？」

たつた今、アリスンに気がついたような怪訝な顔をしています。そして、ジロジロと上から下まで見定めてくるみつこ、視線を走らせました。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5253ba/>

不思議な国のアリスン1

2012年1月14日16時53分発行